日本音楽集団第７回定期演奏会

NIHON ONGAKU SHŪDAN THE 7TH REGULAR CONCERT

昭和43年４月19日／午後６時30分開演／日仏会館ホール

APRIL 19th. 1968／6:30 p.m. at NICHIFUTSU KAIKAN HALL

曲　　目

1. **尺八・三絃および二面の箏のための四重奏曲**／間宮芳生 作曲

（尺八）宮田耕八朗　（三絃）杉浦弘和　（箏）坂井とし子・野坂恵子

2. **尺八のためのコンポジション**／元橋康男 作曲

（尺八）宮田耕八朗

3. **組曲「人形風土記」**／長沢勝俊 作曲

1. ニポポ　2. こけし　3. のろま人形

4. 流しびな　5. キジ馬　6. 木うそ

（合奏）同人　（指揮）横山千秋

（休憩 15分）

4. **前奏曲集第Ⅰ集より**／ドビュッシー＝三木 稔 編曲

1. 亜麻色の髪の乙女　2. 吟遊詩人

（龍笛）芝 祐靖＝客演　（合奏）同人　（指揮）横山千秋

5. **古代舞曲によるパラフレーズ**／三木 稔 作曲

1. 前奏曲　2. 相聞　3. 田舞　4. 誄歌　5. 嬢歌

（ソプラノヴォーカリーズ）瀬山詠子＝客演　（合奏）同人　（指揮）横山千秋

PROGRAM

1. Quartet for Shakuhachi, Sangen and two Kotos

   Michio Mamiya

2. Composition for Shakuhachi — Yasuo Motohashi

3. Song of Japanese Dolls — Katsutoshi Nagasawa

   1. Nipopo 2. Kokeshi 3. Noroma-Ningyo
   4. Nagashi-bina 5. Kiji-uma 6. Kiuso

(interval 15 min.)

4. Sellections from "Préludes No. 1" by C. Debussy

   arranged by Minoru Miki

   1. La fille aux cheveux de lin 2. Minstrels

5. Paraphrase after Japanese Ancient Music

   Minoru Miki

   1. Prelude 2. Sōmon 3. Tanomai 4. Ruika
   5. Kagai

日本音楽集団同人

絃楽器	（箏）	坂井とし子
		白根きぬ子
		野坂恵子
	（十七絃）	宮本幸子
	（三絃）	杉浦弘和
	（琵琶）	山田美喜子
管楽器	（横笛）	向山英一郎
	（尺八）	横山勝也
		宮田耕八郎
		古賀将之
打楽器		田村拓男
		清水義矩
指揮		横山千秋
作曲		長沢勝俊
		三木稔
		元橋康男
ディレクター		鞍掛昭二
客演	（龍笛）	芝祐靖
	（ソプラノ）	瀬山詠子

芝　祐靖（しば　すけやす）

昭和10年生まれ。宮内庁楽部に勤務。龍笛・琵琶・左舞およびフルートの演奏者，舞人であり，また作曲家として，現代邦楽のためのいくつかの作品がある。"舞楽風組曲"によって第17回芸術祭奨励賞（NHK・放送による）を受賞している。

瀬山詠子（せやまえいこ）

昭和30年，東京芸術大学声楽科卒業。畑中良輔，畑中更予に師事。31年，「フィガロの結婚」のケルビーノでデビュー。34年より6回のリサイタルを重ね，メシアン，石桁真礼生，ヒンデミットなど，主に現代音楽を発表してきた。清水脩の「炭焼姫」，ヒンデミットの「ロング・クリスマス・ディナー」，モーツアルトの「フィガロの結婚」などのオペラをはじめ，現代音楽，日本歌曲などの演奏者として知られている。

NIHON ONGAKU SHŪDAN (NOS)

Our group was formed in 1964 by players and composers who desire to develop contemporary music for Japanese instruments. In November 1967, we were awarded the Art Festival Encouragement Prize by the Ministry of Education for our 6th regular concert. The group consists of seventeen members: twelve players, one conductor, three composers, and one director.

Players:		
String Instruments	Koto	Toshiko Sakai
		Kinuko Shirone
		Keiko Nosaka
	17 Stringed Koto	Sachiko Miyamoto
	Sangen	Hirokazu Sugiura
	Biwa	Mikiko Yamada
Wind Instruments	Fue	Eiichirō Mukōyama
	Shakuhachi	Katsuya Yokoyama
		Kōhachirō Miyata
		Masayuki Koga
Percussion Instruments		Takuo Tamura
		Yoshinori Shimizu
Conductor:		Chiaki Yokoyama
Composers:		Katsutoshi Nagasawa
		Minoru Miki
		Yasuo Motohashi
Director:		Shōji Kurakake

Guest Players:	Ryūteki	Sukeyasu Shiba
	Soprano	Eiko Seyama

曲目について

鞍掛昭二

尺八・三絃および二面の箏のための四重奏曲は，三つの章に分かれていて，初めの章は三絃と尺八，第二の章は二面の箏と三絃，そしておわりの章は四つの楽器により，それぞれ演奏される。作曲の動機については，別稿において作曲者がのべられている。6年前に邦楽四人の会によって委嘱，初演されたこの四重奏曲を，録音されたテープで聴いて，この曲をぜひ自分たちのものにしてみたいという意欲にかられてプログラムに組んだわけであるが，そのスコアに相対して，あらためて眼をみはったのであった。完成されきった楽譜の中で，作曲者の推稿のあとをたどり，その思考の内容をみずからのものにする作業がいかに困難なものであるかを，つくづくと悟ったのである。この四重奏曲に関しては，再演，三演という，懐胎のつみ重ねが必要であろう。

尺八のためのコンポジションは，尺八の本曲の中にみられる独特な技法と形をとり入れながら，むしろ精神的な面から古典的な世界に焦点を合わせて，自由な形で作曲された新作である。

私たちの"集団"には三人の作曲家が　り，その三人の個性の指向する方向は，それぞれ対照的に異なっている。その内容については，聴衆の方々がそれぞれの判断を下してくださるであろうが，長沢・三木作品が日本楽器を表現の手段として使いきっているのに対し，元橋作品においては，個々の楽器のもつ歴史的背景に自らがおぼれ込んでいくという，ロマンティシズムが特徴となっている。この小曲もその典型の一つであろうか。

人形風土記は，41年秋についでの再演である。長沢作品としては「子供のための組曲」がすでに集団のレパートリーとして定着しているが，この曲も第2のレパートリーとして，かなり我我自身の血や肉になってきている。この曲の主題は日本各地の「ふるさと」の風土を母として生まれてきた，単純素朴な郷土人形や郷土玩具である。これらの人形たちは日本民族の伝統というものについて，現代の我々に，彼ら個々の具体的な形を通じて語りかけをしてくる。ニポポは古くからアイヌに伝わる木彫りの信仰人形。ニポポとは木の小さな子という意味である。こけしは東北地方に伝わる古い伝統的な郷土人形。のろま人形は佐渡でつくられる首人形で，約300年前，江戸から伝えられた人形芝居の人形の"かしら"を，かたどってつくられた。おどけた顔に特徴がある。流しびなは鳥取地方に古くから伝わる行事から生まれたもの。すべてのわざわいをひなと共に川に流して，子供の健康と幸福を祈るという民俗行事である。キジ馬は大分県，万年山周辺の村々でつくられる白木のキジ車。ナタ一丁で仕上げる素朴なものである。木うそは福岡

県の大宰府天満で1月7日に行なわれる「うそ替え」の行事に使われる，木彫りのうそ。うそは首から頬にかけて美しい紅色をした鳥である。（各人形の説明は，斎藤良輔著「日本の郷土玩具」による）

ピアノのための前奏曲集はドビュッシー（1862－1918）の最大傑作の一つである。12曲ずつ2集にまとめられ，各曲に表題がついている。亜麻色の髪の乙女は，フランスの詩人ルコント・ド・リールの同名の詩から作曲されたもので，最もよく知られている。吟遊詩人は，中世ヨーロッパで活躍した楽人たちで，ヨーロッパの作曲家たちの標題音楽の題材として，あるいはオペラの登場人物として，しばしばとりあつかわれる。

今回はこの2曲だけが上演されるが，前奏曲集の中には，日本楽器へのオーケストレーションによって，すぐれた効果をあげ得る曲が数多くあり，次の機会には，さらにいくつかの曲を加えて上演するべく，準備をしている。

古代舞曲によるパラフレーズは，古代と現代とを結ぶ，アクティヴでありながら古典的な世界をめざし，荒々しさと繊細さとのきわどい均衡の中でかもしだされた，多様な色彩とダイナミズムを持つ作品である。前奏曲は器楽的な構成美を意図した簡潔な様式で書かれ，後につづく4曲を集約しながら，独得な古典的構成と，その中にちりばめられた民族的要素を感じさせる。相聞（そうもん）は万葉の恋の歌で，ソプラノ，能管，琵琶，箏群，尺八などがそれぞれ異なった表情で重なり合い，応答し合う抒情的な楽章である。田舞（たのまい）は田植の神事の舞。後に平安，鎌倉時代に田楽として遊芸となったが，この曲では原始の神事をほうふつとさせられる。誄歌（るいか）は葬祭の歌。一管の低い尺八のおおらかな流れをめぐって，箏群ともう一管の尺八の衝動的な慟哭（どうこく）のような動きがからまる。嬥歌（かがい）は，上代，男女が相集まって互に呼ばい合う群舞をさしている。歌垣とも書き，後世の盆踊りの起源ともいわれている。人間の性的本能に根ざした快い昂奮が，遠いざわめきから次第に高潮して頂点に達し，やがて跛行的に去って行く。

この「パラフレーズ」は，「子供のための組曲」と同様，今や集団にとって欠くことのできないレパートリーの一つとなっている。

間　宮　芳　生

日本音楽集団が，この数年に挙げた業績は，見事なものです。わたしたちの民族の，音楽文化の今の問題への，するどい目と，未来への明確な展望が，感じられるばかりでなく，目前の，さまざまな現象・流行などに目もくれず，その明確な展望に立って着手した仕事を，しんぼう強くけい続し，着々と成果をつみかさねて来ていることに，なにより，ぼくは尊敬と共感をおぼえます。こんど，ぼくの「尺八・三絃および二面の箏のための四重奏曲」をとりあげて，演奏して下さるということで，それは，ぼくにとって大きい喜びであり，期待も大きいわけです。

この曲を作曲してから，もう，6年になります。古典の様式美は，その古典を生んだ，社会の歴史，人間の歴史の集約であり，自分の民族の古典の様式美の中に，その様式をつくり上げて来た，歴史の中の人間の姿をとらえるという，努力なしに，わたしたちが新しい芸術の展望を，考えることはできないはずです。そんな気持が，この作品を書かせました。あれから6年，その後ぼくは日本の伝統的な楽器による作品に，手をつけることをしないで来ましたが，近いうちに，この6年の反省を含めて，新しい作品を手がけるつもりでいるのです。

音楽集団によせて

野　口　　鎮

音楽集団の定期演奏会を，楽しみにしている一聴衆として，この集団諸氏の芸術に対する姿勢の誠実さと，その方向に限りない愛着を持つものです。そして何回かの演奏会からの感じた事を書かせて戴きます。

先ず集団の諸芸術家が本当の意味での日本の"心"日本人の中に横たわる"心"を追い求め，掘りおこし，それをローカルな美しさに安易に定着しないでこれを高い次元で通用し得る様な芸術に発展させ様としている所がたまらなく，たのもしく感じます。例えば一昔前に，日本的なものといえばすぐに　富士山，さくら，浮世絵，と江戸時代的なもので代用させ，最近では　禅，茶，いけ花，わび，さび，という様に安易な見本市的日本が多く言われる中で，音楽集団は，それ等を含めて，吾々の血の中にあるものを正しくとり出して，それを"音"によって，吾々を楽しませてくれる努力をしている様に思われます。

先日私は葛城の山の上から，春の日にもえる大和平野をのぞみました。そこに年月のへだたりをこえて，先達（せんだち）たちの，豊かな秋のとり入れのよろこびを歌ったそこぬけに明るい日本を感じました。それ等を，芸術家三木氏は豊かなイメージで"かゞい"という作品で吾々に

かたりかけてます。又ある豪族の古墳――それは入口はほんの小さな人一人がやっとかがんで入れる穴の入口が南に向ってあいています。しかしその中へ，すべり込む様にして入ってみると，巨大な石でかこまれた高さ5米もあろうかの大石室です。その中央に一枚岩を，くりぬいて造られた石棺が据えられていました。懐中電燈の光の輪の中に浮き上る石組，漆黒の闇の中に永久の眠りにつく王者と，そしてその石室を作り出した民の声，〝るいか〟が聞えます。日本のダイナミックな〝るいか〟が聞えます。三木さんの〝誄歌〟が聞えます。

又子供のすこやかなる成長を，ひとがたに託して春の日を浴びながら，下っていく流しびな。城下町の夕暮れに，さんざめく子供達の邪気のない笑い声，一瞬のうちに吾々の心をたちわり少年の日々の哀歓を，ふくよかな情感として語りかけて来る，これは長沢作品の世界です。「三絃と日本楽器によるディヴェロプメント」で，徒手の中より空手を生み，どろ染めの中より酉に輝く紅形（びんがた）をつむぎ出す沖縄の人々の心と，丈余の雪原の中から初夏の青々とした稲穂を波たたす津軽の農民のたけしさ。

ともすれば西欧的なものを可とし，尺八，琵琶，三味線，太鼓等を，歌舞伎とか，花柳の巷のものの如く愚見していた私に，この集団の諸作品と演奏は，あらためて日本の美しさを教えてくれます。特に私は，杉浦氏の鋭角的な三味線が大好きです。

長沢作品のじょんがらをひくとき，長唄三味線を太棹に持ちかえたその形のよさと，津軽農民の土の香がただよう演奏がまだ心にやきついています。

この様に各々のパートの芸術家の綜合力が吾々をさわやかにしてくれるのでしょう。

ただ現在の集団に対し一つの希望があります。まことに失礼なたとえですが，今迄の演奏会は大変味のよい一品料理の様な気がします。料理人の誠実さと努力は外にない味わいを私達にもたらしてくれるが，満腹するに一寸足りない。アラカルトのたのしさと同時に，壮大なフルコースのドレスアップして対する料理もあってよい様に思われます。

具体的に言えば，集団の中の一人の作品なり演奏をピックアップして一演奏会を持つという様なことは如何なものでしょう。それだけの力を各々のパートの芸術家は充分持った人々の集団だと信じるからです。的はずれな門外漢の勝手な意見を，どうぞお笑いにならないで下さい。こんなファンがきっと，どこかで次の演奏会を静かにまっている筈ですから。

（筆者は彫刻家，行動美術会友）

ＮＯＳニュース

■昨年１１月７日，日仏会館ホールにおける第６回定期演奏会に対して，芸術祭奨励賞を受賞いたしました。

■本年２月１２日，集団のリハーサルをＰ.Daubeny氏（英・シェークスピア劇場ディレクター）およびＮ.Goldshmidt氏（カナダ・指揮者兼音楽監督）の両氏が相次いで聴きにこられました。その時の感想をGoldshmidt氏は次のように述べられています。

「―前略―感受性の鋭い献身的な指揮者，横山千秋氏の，明確な指揮の下にある日本音楽集団について，私は書きたいことが沢山ありますが，まずいいたいのは，各楽器の演奏者が自分の楽器の奏法に熟達しているということです。とりわけそのうちの何人かの人はきわだって優れています。また，団体精神とアンサンブル技術は，音楽的にも，また同時に精神的にも完璧です。これらの日本楽器のために作曲された音楽はたいへん興味ふかく，またオリジナリティーに富んだものでした。―中略―私は今回の経験によってたいへん興奮しています。」（国際文化振興会，鈴木氏への書簡より）

■３月１１日，日経ホールにおいて，国際文化振興会主催により，日本音楽集団の演奏会が行なわれました。当夜はとくに，各楽器ごとの古典曲のメドレーをプログラムに組み入れ，同人作品の現代曲と対比させる形式とし，私たちの音楽上の主張をわかりやすい形で具現してみました。この演奏会については，その後多くの反響があって，たいへん貴重な試みでした。

■第８回定期演奏会は，１１月１３日（水），朝日生命ホールで行なう予定です。

MEMO

日本音楽集団

連絡先／[redacted]鞍掛方[redacted]　特別会員連絡先／[redacted]清水方[redacted]